

く ら よ し ひ が し こ う こ う
鳥取・県立 **倉吉東高校**

行事や下級生との関わりを通じて
社会で自分を生かす力と態度を育てる

取材・文／藤崎雅子



≫実践ノウハウ

- 学力プラスαを身につけさせる活動を充実
- 担当者が意義を深く理解して実践
- 生徒の縦の関係が生む教育力に注目

鳥取県中部地区を代表する進学校、県立倉吉東高校は文武両道の伝統をもつ。部活動の加入率は約95%。4日間にわたる学園祭では、全学年が縦割りチームに分かれて徹夜で準備に取り組み、演劇や合唱、巨大アート制作などに全力投球。「学業・部活動・行事という3本柱のどれが抜けても倉吉東高ではない」と言われるゆえんだ。そんな伝統の精神を大切にし、進学実績向上という保護者や地域からの期待にこたえらるとともに、生徒を人間的に成長させる数々の取り組みに力を入れている。

社会での活躍を視野に
学力プラスαを育成

2001年、同校はこれまでの取り組みを総括し、ランドデザイン「倉吉東高のかたち」を策定した(図1)。以後10年間、同校教育の指針となっている。目標に掲げられているのは「主体的な学習者の育成」と「21世紀をリードする人材の育成」で、「文武両道」「規律ある生活」「授業の質の向上」「特色ある教育活動」の4つを柱に、学習面はもちろん、それ以外にも熱心に取り組んでいる。校長の名越和範先生はこう語る。

「生徒の大多数が国公立大学進学を希望する本校では、その実現に向けた学習指導の充実が必須条件です。さらに、生徒の将来を考えるとそれだけで十分ではなく、社会で活躍するためのプ

ラスαの力の育成が重要と考えています」

具体的には、まず学ぶ意欲や態度が育つ基盤として、生活面の規律を重視。授業は教員個人の力量に頼るのではなく、ノウハウを共有して教科全体で底上げを図る体制が整えられた。課題や課外授業は精選の方向で、家庭学習と部活動のどちらもおろそかにしないよう指導されている。

さらに、目標に沿った新たな活動も立ち上げられた。例えば、国内外の高校生が共通のテーマについて意見交換する「国際高校生フォーラム」の主催(Case Up①)。2、3年生がチューターとなって新入生の高校生活をサポートする「チューター制度」の導入(Case Up②)。生徒が各自でボランティア計画を立案し、夏休み等の時間を使って自主的に交渉し、取り組む「ボランティア活動」の実践(p.46コラム)。学ぶ意義や心構えについて、教員全員の文章を載せた冊子『学びの復権』の発行(p.47写真)などがある。こうした活動は、自分の興味・関心に基づく、個人的な自己実現だけでなく、自分の力を発揮して社会に貢献していこうとする、社会的な自己実現が強く意識されている。教頭の牧尚志先生はこう語る。

「自己実現のためだけでなく、自分がいいと思った地点で終わってしまいます。しかし、誰かのためにといった社会貢献の意識があると、人には大きなエネルギーが生まれます。そうして人間としての総合力を最大限に伸ばして、将来につなげてほしいと考えています」

>> School Data

全日制普通科 / 1909年創立
 生徒数 / 714人(男子359人・女子355人)
 進路状況(2009年度実績) / 大学 71.0%・短大 1.3%・
 専門学校 5.0%・就職 0.4%・その他 22.3%
 鳥取県倉吉市下田中町801番地
 TEL 0858-22-5205
 URL http://www.torikyo.ed.jp/kurae-h/

Process

立ち上げのプロセス

進学実績向上の使命に
 本質的な学びの構築で対応

およそ20年前、同校は大学進学実績の停滞を地域から厳しく批判され、学校の存続すら危ぶまれた時期がある。そこで同校は長期的な学校のあり方を自由に議論する提言部隊「将来構想委員会(現、ビジョン委員会)」を設置し、委員会の策定した構想に沿って1995年度から学校改革に取り組み始めた。

それにより一定の成果が出ていた01年度。迫りつつある週5日制もにらみ、これまでの取り組みを整理して、時代や流行に左右されない同校の教育の柱を明確化しようという動きが起こった。そして同委員会を中心に検討してできたのが「倉吉東高のかたち」だ。改革の端緒となった進学実績向上のための受験勉強にとどまらず、幅広い活動を通じて「学び」を促進する方向性が全教員で確認され、現状の不足を補うために「フォーラム」や「ボランティア活動」などの新たな取り組みもスタートした。

「本校には本校出身の教員がたくさんいます。高校時代に行事や部活動に燃えた自身の経験から、机上の勉強だけでなく人とのつながりの中で学ぶ大切さを知っており、目指す方向性には納得感があったと思います」(牧教頭先生)

図1 倉吉東高のかたち 概念図



Close up ①

国際高校生フォーラム

学校の枠を超えて
 現代的テーマを議論

現代社会の諸問題の解決策について高校生が意見交換を行う「国際高校生フォーラム」。そのならいについて、フォーラム担当の山田智子先生は「身の回りや世界の問題に目が向き、その解決に主体的に取り組んでいく生徒を育てたい」と話す。学校の枠を超えた大きなステージでより広い

COLUMN

社会のためにできることを
 各自が考えるボランティア活動

ボランティアについて学び、活動成果を共有する「ボランティアLHR」では、生徒のボランティア委員が司会・進行を行う。そして、ボランティアの内容は学校から案内されるものほか生徒自身が見つけたものでもよく、各自が計画して休日や放課後に実践する。「ボランティアの交渉などで失敗しても、それが本人の成長につながります」(教頭・吉田祐子先生)。活動内容は、「自分が社会のためにできることは何か」という視点で、幅広くとらえさせているという。「例えば、毎日通学路のゴミ拾いをする。隣で独り暮らしをするおばあさんの雪かきを手伝う。こうした自分の身近で何を気づけるかを大切にして、自発的な行動を促したいと思っています」(ボランティア担当・小谷弘幸先生)



国際高校生フォーラムの発表とレセプションの様子。進路指導主事の芝野浩貴先生は「何事にもあきらめがちな生徒が、受付係のチーフを苦勞して務めて以来、驚くほど勉強への姿勢が変わりました」と話す

『学びの復権』には、勉強のノウハウではなく、「学び」に関する教員のメッセージが綴られている。LHRで活用

視野をもたせようと、志に共感してもらえそうな全国各地の高校、ホームステイ等で提携する韓国の学校や元同校A・L・Tが赴任した英国の学校に参加を呼び掛けた。県から予算を獲得し、毎年約10校が参集、扱うテーマの専門家も招いて大々的に開催されている。

毎年テーマは環境問題や科学・技術など様々な分野から同校が設定しており、世界的な不況が影を落としていた昨年度の第8回テーマは「高校生の考えるこれからの経済」だった。出場するのは各校代表1チームで、同校では7月の学園祭にて行われる縦割りチーム対抗プレゼンテーションコンテストの優勝チームが代表となる。各校は調査・研究を行い、自由な発想で解決策を模索。当日はパワーポイントなど、視聴覚機器を駆使して発表を行う。最後はゲストの専門家と参加校相互の評価によって、優秀チームが選ばれる。

また、ゲストによる講演、議論を深める討論会、各校の生徒や教員がゲームやクイズで交流する場も用意。内容の濃い3日間のプログラムとなっている。

生徒が得意分野を生かし 責任感をもって運営

フォーラムの準備・運営には、70〜80人の同校生徒が実行委員として動く。その意義について山田先生はこう話す。

「プレゼンそのものも大事ですが、裏方を担う

INTERVIEW

国際高校生フォーラムの実行委員として



実行委員長・3年 陶山達也さん (写真中央)
実行副委員長・3年 山本知佳さん (左)
総務パートナー・3年 明島 南さん (右)

——フォーラムの魅力とは

陶山さん「人とたくさん関わるところだと思います。発表や意見交換だけでなく、交流会で他校の高校生と話す機会もあって、昨年知り合った他校生とは今でも時々「勉強したいへんだよね」などとやりとりしています」

明島さん「毎年、社会で問題になっていることを真剣に考える機会になること。そして、県外や海外のたくさんの高校生のいろんな考え方を聞くことで、視野を広げる良さがあると思います」

——今年はどうなフォーラムにしたいですか

陶山さん「目指しているのは「過去最高のフォーラム」。テーマについて考えを深めたり、一緒に取り組む仲間の縦や横の結束を強めたり、他校生と知り合いになったり、それぞれが自分を高めることに利用してもらえればと思います」

山本さん「去年はステージに立つ側と観客として聞く側の温度差があったので、今年はそれをなくすぐらいのものを作れたらいいと思います。エンターテインメント性を高めたり、準備段階から新聞を出したりして身近に感じてもらう工夫を検討中です」

明島さん「私は校内の出場チームに対するアドバイスも仕事の一つで、時にはダメ出しも必要な憎まれ役です。いい加減なことを言って感傷させないように一生懸命考え、委員の仲間を支えに心を強くしてサポートしていきたいです」

——3年生になって受験勉強や部活動との両立はたいへんかと思いますが

山本さん「忙しいことが楽しくなることがあるんです。このおかげで夏は本当に充実します」

明島さん「やることがいっぱいでもう勘弁して!という時もありますが、両立していく中で自分に得るものがあるから、それを力に受験勉強も頑張れるかなと思っています」

図2 第8回国際高校生フォーラムの概要 (09年度)

■ プレゼンテーションテーマ 高校生の考えるこれからの経済 一人々の暮らしを支え、希望をもたらす経済のあり方とは一
■ 参加校 ※10年度より長崎東高校参加予定 長野県松本深志高校 / 静岡県立浜松北高校 / 鳥取県立米子東高校 鳥取県立倉吉東高校 / 鳥根県立松江北高校 / 岡山県立岡山操山高校 鹿児島県立甲南高校 / 英国 Baines school / 大韓民国 京畿道安養高校
■ ゲストコメンター 一橋大学大学院商学研究科長・一橋大学商学部長 小川英治氏 神戸大学大学院経済学研究科教授 地主敏樹氏

図3 国際高校生フォーラム タイムテーブル (09年度)

	9(時)	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
8月7日	会場準備	発表予行A	昼食	発表予行B	会場準備	受付	開会行事 基調講演	移動	情報交換会	発表予行C	
8月8日	受付	プレゼンテーション	昼食	プレゼンテーション	討論、まとめ、講評	会場移動	レセプション				
8月9日	受付	表彰、講評、特別講義、閉会行事	交流行事								

図4 国際高校生フォーラム 生徒実行委員会

担当	おもな内容	人数
総務	委員会全体の統括、他校との連絡	7
舞台	当日の舞台セッティング	13
情報機器	発表時の情報機器操作、参加校の紹介映像作成	7
情報交換	参加校との情報交換、各校の進捗状況の確認(メール)	6
交流	レセプション企画・運営、参加校のアテンド	20
受付	当日の来客対応	23



主幹・フォーラム担当
山田智子先生



教頭
吉田祐子先生



教頭
牧 尚志先生



校長
名越和範先生

ことに大きな価値があると考えています。参加する各学校は真剣ですから、実行委員も失敗してはいけないと緊張感をもって取り組んでいます。そこで気配り、企画力、運営力：幅広い力が鍛えられるようです」

実行委員には様々な係があり、生徒は普段は発揮できない得意分野を生かすチャンスでもある。例えば、人前に出るのは苦手だがパソコンに強いという生徒は、情報機器の係として生き生きとすばらしい働きをするという。また、うまくいかなくて悩む生徒もいるが、それが生徒を成長させるよつだ。

難しいのは、発表者でも実行委員でもなく、観客となる生徒の参加意識をどう高めるか。今、実行委員は頭を悩ませながら、対策に取り組んでいる最中だという。

Close up ② 生徒チューター制度

チューター役に育まれる
意欲と自信

新入生がスムーズに高校生活をスタートできるようにと始まった「チューター制度」。チューター役は2、3年生が担うのが特徴だ。

「それまでも縦割り班で学園祭や応援歌練習が行われていて、先輩が下級生に働きかける文化がありました。そこに発想を得て、より幅広い面で新入生をサポートできるよう体制を整えました」

(名越校長先生)

チューターは2、3年生の希望者から120人程度を選考。新入生4人に対してチューター2人のグループを編成する。担当の川北多美先生が最も難しいと感じているのが、このグループングだという。

「効果的な仲間づくりができるように、機械的にグルーピングするのではなく、出身校で固まらないようバランスをとったり、成績や志向性の似た生徒を組み合わせたり、慎重に行っています」

上級生と1年生がグループでその時々のテーマについて話すチュータリングは、入学前の3月から夏休み前まで計8回行われ、各回のテーマはあらかじめ計画されている(図5)。例えば第1回は校内の案内から始まり、「倉吉東高のかたち」や高校生としての心構え、入学前にマスターしておくべき勉強などが伝えられる。そのほか適宜、新入生の不安に対してチューターがアドバイスしたり、勉強を教える場面もあるという。

「有意義なチュータリングのためにはいかにチューターを育てるかが大切(川北先生)と、毎回実施前にはチューターを対象にオリエンテーションを実施している。また、チューターと新入生の双方が『チューターハンドブック』を持ち、毎回の記録や感想を記入(図6)。教員も状況把握に役立っている。

終了後は新入生とその保護者、チューターにアンケートをとって効果測定を行う。その結果を見ると、効果的な方法を試行錯誤してきた甲斐

図5 チュータリングのスケジュール

※=合格者登校日

2月	2月28日	チューター任命式
3月	3月10日	チューターオリエンテーション(第1~3回に向けて)
	3月18日(※)	チューター代表あいさつ
	3月19日(※)	チューターマッチング、第1回チュータリング
4月	3月25~31日	第2回チュータリング
	4月1~6日	第3回チュータリング
	春休み中	グループごとに適宜(最低限2回)
	4月7日始業式	チューターオリエンテーション
	4月13日	第4回チュータリング
5月	4月26日昼	チューターオリエンテーション
	4月28日LHR	第5回チュータリング
	5月17日昼	チューターオリエンテーション
6月	5月19日LHR	第6回チュータリング
	6月7日昼	チューターオリエンテーション
7月	6月9日放課後	第7回チュータリング
	7月12日昼	チューターオリエンテーション
	7月14日放課後	第8回チュータリング

図6 チューターハンドブックの記入例

チュータリングの記録(第5回)	
実施日時	4月28日 水曜日 / 1時20分 ~ 時 分
実施場所	1-6 教室
① 1年生からチューターへ	感想・学んだこと等 授業がスムーズで、授業の進め方が、あじわいがある。 7月中旬に、大分県立、大分県立LHRを真面目にがんばりたいです。 10月には、高校は大事にしようと思ってるので、10月には、授業 頑張りたいです。よろしくお願いします。 質問・意見・要望
	チューター署名欄
② チューターから1年生へ	感想・意見・要望・指示事項 7月中旬は、中間に上がる大切な存在なので、今の計画を立てて 実行するように。大分県立LHRは、年に数回しかないので、その数回を



ボランティア担当
小谷弘幸先生



チューター担当
川北多美先生



専攻科担当
竹歳真一先生



進路指導主事
芝野浩貴先生

があって、満足度は年々高まる傾向にある。チューターから影響を受けた新入生が「次は自分もやってみよう」と、チューター希望者も増えているという。

「新入生にはもちろん、チューターとなる上級生への効果の大きさを感じています。行事の意義や楽しみ方について改めて考えたり、新入生に勉強頑張れと言っ以上は自分もきちんと結果を出さないといけないという意欲につながったり。新入生に学校や自分のことを語ることは、自信にもなるようです」(川北先生)

Close up ③ ノウハウと精神の継承

教師一人ひとりが意義を理解し次へと伝えていく

高い志で始めた取り組みも、教員が入れ替わることによって形骸化する例が少なくない。しかし、同校のフォーラムやチューター制度、ボランティア活動などは、開始から10年たったものも色褪せていない。その理由は第一に、「倉吉東高のかたち」として方向性が明確になっていることがあげられる。そして、それを継承する教員の体制が大きいようだ。

具体的には、毎月の定例職員会議の後、短時間の職員研修を実施。進路指導研修や大学訪問の報告会など様々な研修を行うなかで、「倉吉東高のかたち」の精神を着任間もない教員を含めて

一人ひとりが深く理解し、協働意識をもてるようにしている。行事や特別活動の実践では、「例年どおりやればいい」や「スケジュールに間に合えばいい」という雰囲気はない。実務面とともに意義が引き継がれ、担当者が気持ちを入れて企画・運営する流れができていく。専攻科担当の竹歳真先生は、「それが活動を通じて生徒にも伝わり、さらにチュータリングや学園祭の縦割り班などによって、先輩から後輩へと受け継がれている」と、生徒への波及も感じている。

また、「出る杭は伸ばす」という方針で、若手も率直に意見を言うムードがあるという。30代前半で主任を任されるケースも珍しくない。

「教育システムを維持・発展させるには、それを支える教員が伸びていく必要があると思います。教員がやらされ感ではなくスキルアップしようと取り組んでいることが、本校の強みの一つでしょう」(名越校長先生)

今春、同校の現役国公立大学合格者数は、県内トップの175人。これは20年前の約3倍だ。目覚ましい躍進に、周囲からは「他のことを切り捨てて受験勉強ばかりさせているのではないか」と誤解されることがある。しかし実際はその反対だ。好調の理由について名越校長先生は「3年間の様々な経験や働きかけで、学ぶことへの意欲、困難にくじけない粘り強さ、支え合う仲間意識が培われた結果では」と考えている。牧教頭先生はこう話す。

「もし部活動や学校行事をそぎ落として受験勉強に集中させても、それは本当の学びとは言えませんし、ここまで進学実績は伸びなかったでしょう。富士山が日本一高いのは日本一広い裾野をもっているから。大学合格のために効率よく勉強したいと考えがちですが、それを打ち破って自分を切り開いてほしいですね」

INTERVIEW

チューターとして後輩に伝えたいこと

●「ぼく自身が1年生だった時のチューターの先輩は学園祭でクラスリーダーを務めていた人で、リーダーの楽しさや人前に出ることのおもしろさを教えてくれました。それで自分もやってみよう、クラスリーダーになって学園祭を十二分に楽しむことができました。今でも話をする機会があって、よい影響を受けています。その経験を自分のものだけにしまわずに、次の代にも伝えていきたいと思ってチューターに立候補しました。それがまた下の学年に引き継がれ、東高の伝統になったらいいと思います」(3年・梅田奏介さん)



●「1年生の時のチューターは、その年の生徒会長さんでした。東高生のあるべき姿を具現化したようないい先輩で、自分もこうなりたい、と思ったのを覚えています。今、新入生に伝えたいのは、自分も普段から大切にしている『やってやるぞ』という向上心を、外に出さなくても心の中にもってほしいということ。ぼくは1、2年と成績があまりよくなくて、3年生になってからちょっと這い上がってこうしているのですが、そんな自分の経験を話したりしていきたいです」(3年・朝妻惇さん)